
砂浜

レンタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂浜

【Nコード】

N0878T

【作者名】

レンタ

【あらすじ】

主人公の広田は半年前から同じ会社に勤務する女性、楓雪とつき合い始めた。時は4月、デートで二人の家から車で1時間ほどの海水浴場を訪れた。しかしまだ泳ぐには早い季節、海の家営業もない。シーズンオフで他に車がない駐車場、入り口に近いところ止めて外に出る。二人は誰もいない、たださざ波の音だけが静かに聞こえる砂浜をゆっくりと歩き始めた。

1 (前書き)

登場人物

広田 佑 25歳

この物語の主人公。

楓 雪 23歳

この物語のヒロイン。

季節外れの海水浴場、他に誰もいない駐車場に車を止めた。空に雲はほとんどなく快晴で、フロントガラスには眩しい太陽の日射しが照り付けている。

「誰もいないね」

彼女が周囲を見渡して呟いた。

「うん。どうする？」

「降りよう」

「そうだな」

二人はドアを開けて車を降り、並んで手をつないで歩いていき、出入り口から砂浜に踏み出す。1時間前に家を出たときは10時前でまだ暑くはなかったが、11時を過ぎて太陽は南の空高く、白い砂浜の照り返しもあつて首筋に汗が滲んできた。

「暑いね」

「ホント暑い」

「ちよつと波打ち際まで歩こうか」

「うん」

駐車場から波打ち際まで大体200メートル、二人はおでこに手を当てて強い日射しを遮り、ゆっくりと波打ち際まで歩いて行った。

波打ち際まで歩いていく間、僕は去年の8月にこの海水浴場に来たときのことを思い出していた。実は彼女と初めて話したのはそのときだった。同じ会社に勤めている二人とはいえ、商品開発部の僕と経理部に所属している彼女、お互いに食堂で相手の顔を見かけたことがある程度にすぎなかった。

そんな二人の距離が縮まり、話すようになったきっかけ、それはたまたま同じ日にそれぞれ友達に誘われて、この同じ海水浴場に来ていたこと。昼過ぎ僕と一緒に来ていた友達4人は、ボートで沖に出て行ってしまった。別に置いてきぼりをくらったわけでない、じゃんけんにかけて乗ることができなかっただけ。一人で4人が戻ってくるのを待つのも暇なので、砂浜をぶらぶら歩いていると、同じように一人でいる彼女、雪さんを見つけた。

僕には話したことがなかったとはいえ、少なからず彼女のことは気にしていた。あとで付き合いはじめてから話を聞くと、彼女も僕のことを気にしていたそう。もちろん僕は海パン1枚で、彼女はセクシーなビキニ姿、少し恥ずかしい気持ちはあったが勇気を出して話しかけてみた。

「あの、こんにちは」

「こんにちは、えっと……」

彼女は僕の挨拶に答えてくれた。ということは少なくとも僕のことを知っているのは確かだ。

「雪さん、ですよ」

「は、はい」

彼女は少し戸惑ってはいたが、はっきりと返事してくれた。

「僕のこと」

「もしかして……、広田さん？」

なんと驚いたことに彼女は僕の名前を知ってくれていた。

「はい。今、一人なの？」

「うん。友達と一緒に来てただけ……、私が昼寝をしているうちにどっか行っちゃって」

「あつ、じゃあ、僕と一緒にだ」

「そうなの？」

「うん。じゃんけんに負けちゃって、ボートに乗れなかったんだ。

あはははっ」

「あはっ、なら、ちょっと二人で話しません？」

「はい」

僕が誘わないといけないと思っていたが、彼女のほうから“話そう”と持ちかけてくれた。そのときに彼女とはなんとなく気が合いそうな予感がして嬉しかった。それから二人は1時間ほど話しをして、お互いの仲間が戻ってくるまでも楽しい時間を過ごした。

思い出の海水浴場、これが二人にとっての出会いだった。

靴に波がかかる直前まで海に近づいたとき、僕は彼女と出会った去年のことを思っすごく懐かしさを感じた。

「ねえ、ゆうちゃん」

「なに？」

「覚えてる？　ここで初めて会った時のこと？」

「ああ、もちろん。懐かしいな」

「うん」

ちょうど彼女も僕と同じことを思いだし、同じ気持ちだった。

ちなみに今朝読んだ新聞によると、満潮の時間は1時間ほど前に過ぎていて、今波が近い位置まで来ていても、気付かないうちに濡れることはない。

僕は海のほうに向けていた視線を彼女に移して肩に手を置くと、二人は目を瞑り軽く頷いて唇を近づけていった。

触れ合った二人の唇、彼女とのキスは頻繁にしていたが、今日はいつもと違って柔らかくとても心地よい感触に感じられた。そしてそれは彼女も同じだったようで、二人はいつまでも、いつまでも、離れることができず永遠に強くお互いを求め合った。

唇を強く吸って舌を激しくからませ合い、何度も何度も唾液を送り込み合った。時が経てば経つほどに“ちゅぱちゅぱ”といやらしい音が二人の間で鳴り響き、最後には増えていった唾液を溢れさせそうになり、唇を離れた。

「だ、大丈夫？」

僕は口の下に垂れた唾液を拭っている彼女を気遣う。

「うん。ありがとう」

「こちらこそ。今までで一番のキスだったな」

「うん。私、すごく嬉しかった」

「僕もだよ」

二人で頷いて思わず零れた満面の笑み、まさに最高のキスができた証だった。

6
それから二人は波打ち際で肩を寄せ合い、太陽からの白い光が乱反射して宝石のように輝く海をしばらく眺めていた。

そして20分近く経っただろうか、それまで黙っていた二人だが、少し前にいた彼女がちょっと僕のほうに振り向いて言った。

「ねえ、このあとどうするの？」

「そうだな。もう車に戻る？」

「うんうん、もうちょっといたいな」

「そっか……」

「それと……、今日さ、このあと……」

「ん？」

「えっと……」

彼女はそう言いながら下を向いて、顔を若干赤らめている。どうやら恥ずかしさを感じているようだ。こういうときは僕がその言いにくいことを察してあげたい。これまでの二人の会話と雰囲気をもっとに考えてみた。

先ほど二人でキスをしたとき、いつも違う感触に甘い雰囲気を感じ取ったのかもしれない。それはこのまま海辺で過ごしたあと、どこかまた止まってみて、買い物やドライブをして帰るだけにしたくない、もっと一緒に二人でいたいという正直な気持ちにながっている。

そう考えられたとき、僕は彼女が言いづらくしていたことが何か気が付けた。ただこれは単なる僕の思い込みかもしれない、単なる舞い上がりかもしれない。でも今ここで言うべきと思う、たとえ間違っていたとしても、これが数少ない二人としてのチャンスかもしれないのだから。

「なあ、ユキ？」

「なに？」

「僕、たぶん分かったよ、ユキが言うとしてること？」

「ホント？」

「うん」

「じゃあ、言って」

僕は彼女のお願いを受けて一つ深呼吸する、そして意をけしてその言葉を口にした。

8 (最終回)

「今夜、一緒にホテルにでも泊まるうか」

「うん！」

僕は勇気を出して言った一言に対して、彼女ははっきりと頷いてくれた。

「はあっ、よかった」

でも同時に緊張の糸が切れたのか、ホッとして思わずこう口にした。

「ふふっ、ありがとね。大丈夫だよ、私も同じ気持ちだから」

「そっか」

「ねえ、そろそろ行こう」

「そうだな」

僕が彼女の気持ちを察することができたことで一段落した二人のやり取り、そして今決めた愛を確かめ合う大切な時を今夜過ごすこと、少しの不安と大いなる期待を胸に、海と太陽に背を向けて駐車場までゆっくりと歩いて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0878t/>

砂浜

2011年5月25日22時22分発行